全国農業協同組合中央会会長賞

生きものマーク

東京都 東京農業大学稲花小学校四年
滝澤 まほろ

今年もまたヤベエ取りの季節がやってきた。ヤベエとは、イネ科の多年草のキシュウスズメノヒエのあだ名で、水田などに生える厄介すぎる雑草だ。

七月八月の田んぼの暑さは、命の危険を感じるほどだ。下からは熱く湿った空気が上がってきて、上からは太陽がガンガン照らしてくる。長靴はまるでトースターで焼かれたように、ジリジリと熱く痛くなってくるから、足先を稲のわずかな影に入れて守る。

雑草が稲の間に生えると、地面と稲の上に生い茂り栄養をうばい、病気や害虫の発生にもつながる。雑草を一緒に刈り取ると、雑草の種を選別除去しきれず、お米に混じってしまうから、おいしいお米を届けるために刈り入れの時まで雑草との戦いは続く。

なぜ私が田んぼで雑草取りをしているのか、それは二年前にさかのぼる。

二年生の夏休みに、気候変動が原因で北極や南極の氷が溶けていることを探究学習した。情報を集めて、どうすればこの問題を解決できるかを考え、専門家にメールで質問したりした。その結果、南極北極に行って何かすることは無理だけれど、日本の野山を自然豊かな環境のまま守ることに関わることはできると思った。水も空気も地球上でグルグルとまわっているから日本の水を守ることが、遠い南極北極の氷を守ることにつながると考えた。

他の動植物がいないと人類は生きていけないことを、私たちは忘れがちな気がする。自分の住んでいる地域以外の問題は、そこの地域に関係する人たちだけの問題で、自分には関係ないとスルーしがちだ。でも、地球規模で皆が自分に関係することだと考えないと、このまま進んでしまった未来は、とても生きづらい世界になっていそうだ。

では、何が私に具体的に出来るだろうかと考えた中で「生きものマーク米」というお米のことを知った。生きものマーク米とは、生き物ブランド米とも呼ばれているが、農林水産業を通じて生物多様性を守り育む取り組みの一環として生産されるお米だ。農地やその周辺の自然環境を保全し、様々な生き物が共存できる環境を作り出すことを目的としている。全国で展開されている生きものマーク活動の中から、何とか行ける距離の湘南タゲリ米を見つけ、活動に参加させてもらえないか問合せた。

それから、田んぼのマナー、多様な生態系、高齢化や資金困難による脱農など田んぼについて教えてもらいながら、私のヤベエ取りがはじまった。近くで見ていると、ただ消費を増やすだけでは、持続可能な農業は難しいと感じる。だから、多くの人に、生産現場に興味関心を持ち、生物多様性を考えている農林水産物の価値を認め、応援してほしい。そのために、消費行動以外にも、地域の農林水産に関わる行動を皆でやっていきたい。